九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

オゴメク幻想 ： 「オコヅク考、オゴメク考」補訂を兼ねて

白石, 良夫
文部科学省主任教科書調査官

https://doi.org/10.15017/13181

出版情報：語文研究. 104, pp.44-57, 2007-12-21. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

オゴメク幻想

――「オコヅク考、オゴメク考」補訂を兼ねて――

白石良夫

一　前稿要約――まず歴史を倒叙して

昨年一二月、本誌一〇二号に、わたしは「オコヅク考、オゴメク考――帚木巻の異文の解釈」なる論稿を発表した。帚木巻「はなのわたりおこつきてかたりなす」（青表紙本）の「おこつきて」の校訂本文と解釈、および異文「をこめきて」（河内本）との関係を考証し、今日の辞書類に著録される「お（を）ごめく」が架空の古語であることを結論づけたものであった。

だが、拙稿の叙述は、国語史と国語学史を意識的に峻別していない読者を、いささか混乱に陥れたようである。したがって、ここで補足説明をしておきたい。本稿を正確に理解していただくためにも、この説明はぜひとも必要と思われる。

前稿では、源氏物語帚木巻「はなのわたりおこつきてかたりなす」の、現在一般におこなわれている校訂本文と注釈の検討から始めた。

問題箇所の現行の校訂本文は「を（お）こづきて」である。語釈は「ばかみたいに見せて」と「ひくひく動かして」と二説がおこなわれている。前者はこれを「烏滸」＋「づく」とみた解釈である。だが、後者の「ひくひく動かす」の解釈は、青表紙本系の本文をとるかぎり、じつはきわめて危うい。なぜなら、この語義は、『湖月抄』が河内本の「をこめきて」を「おごめきて」と校訂したことによって起こったからである。それを後続の古学者の多くが「うごめく（蠢）」の意と理解して今日にいたっており、それが紛れこんで、青表紙本

の「を（お）こづきて」をも「ひくひく動かす」と解釈しているのである。

そして、『湖月抄』以前にオゴメクという語は実在しなかった。というのが、前稿において考証したわたしの結論である。オゴメクは架空の古典語であり、だから当然、オゴメク＝「うごめく」という等式も架空である。オゴメクが実在しなかったのなら、その等式が青表紙本のオコヅクに紛れこみようはない。紛れこむのは『湖月抄』以後の源氏本文の解釈であって、源氏物語が成立した時代にさかのぼって源氏物語を解釈するという、国文学のごく常識的な立場にたてば、「ひくひく動かす」という注釈は消去される。

二　おなじく前稿要約――歴史をくだって

以上が前稿のあらましである。ご覧のように、歴史を倒叙した。「歴史」は一般に、時代を下りながら叙述されるが、それは今日から遡って観察した過去を再構成している場合がおおく、結局、「倒叙〇〇史」と銘打った歴史とそんなに変わらない。そういった歴史記述が間違った方法だというのではない。所詮、われわれはそういう方法でしか過去を評価できないからだ。だが、こういった方法はおうおうにして、事実の歴史（国語史）と学説の歴史（国語学史）とを混同するという陥穽に、われわれをおとしいれる。

それでは、そういった混同を極力排除し、現在わかっている事実をもとにして、源氏物語成立から時代をくだって拙稿を叙述しなおせば、どうなるのか。

源氏のオリジナルな姿は、わからない。われわれは、中世の源氏本文に、「おこつきて」（青表紙本）、「をこめきて」（河内本）の二通りあったという事実から出発する。そして、青表紙本は「オコヅク」（烏滸づく）であり、河内本は「オコメク」（烏滸めく）である。両語とも、中古から中世にかけての文献では、用例に事欠かない。というより、「づく」も「めく」も、接尾語としておそらくどんな名詞にもつくであろうから、用例の多寡にはあまり関係ない。いずれにしても、解釈にはさしたる相違をまねかない本文異同である。

この本文と解釈に変化がおこるのは、江戸時代初期であった。『湖月抄』が当該箇所を「おごめきて」と校訂した。だが、オゴメクは、それまでの古典文学の世界では未知の語彙であった。この部分、河内本がもとになっていることの明白な『湖月抄』が、どういう経路でそのような校訂をしたのか、そこのところははっきりしない。ひょっとしてうっかり濁点をうってしまっただけ、などというのも、稚拙なしろうと考

えと一蹴すべきではない。この濁点を、古典学者北村季吟の所為とばかりはいえないからだ。版本になるまでには、版下書きと彫師の手を経るのである。原稿の清書も季吟だとは限らない。古典学黎明期の古典の出版物に、われわれは近代文献学の発想を持ち込んではいけない。

とにかく、本来「烏滸めく」だったものが「お（を）ごめく」となって流布した。古学者は、語感から類推してそれを「うごめく」と結びつけた。「うごめく」で解釈すればきわめて自然であることが、この説の定着に拍車をかけた。ただ、ここで注意しなければならないのは、あくまでもこれは『湖月抄』の「おごめきて」の解釈である、という点である。河内本の「をこめきて」の解釈でもなければ、ましてや青表紙本の「おこつきて」の解釈でもない。古学者が解釈していたのは、『湖月抄』が生んだ架空の源氏物語本文だったのだ。

古学者の大半が源氏物語を『湖月抄』のオゴメクで読んでいる分には、それを混乱とはいわない。だが、近代文献学が精密になってきて、その成果として青表紙本の学問的評価が定まった。これが解釈に混乱をひき起こす。

河内本が駆逐され、青表紙本の「を（お）こづきて」が確定的な本文となった。このことじたいは問題ない。だが、河内本がもとになっている架空の語オゴメクによる解釈は、本文批判と切り離されて、そのまま残された。これが問題なのだ。本文はオリジナルを目指したはずなのに、解釈のほうはそれからとり残されたのである。それが朝日全書の頭注、新潮集成の現代語訳であり、それらの注釈書に目配りした日本国語大辞典・小学館古語大辞典の、要領をえない記述であった。

三　補訂しなければならなくなった要因

したがって、前稿で引用した、もうひとつの用例、徒然草も、ただしくは「をこめきて」である。それを「おごめきて」と引用したのは、まだ「おごめく」が架空の古語だと結論していない段階であったので、現在通行の徒然草校訂本文を使ったにすぎない。

以上の要約は、前稿執筆時点のわたしの知見と見解である。その後、補うべき点も見つかり、また若干の訂正も必要となった。

補訂の要因は二つある。ひとつは、前稿で源氏物語研究史への目配りが不十分であったことのため。もうひとつは、前稿では徒然草の用例については宿題にしておいたことのためである。徒然草のテキスト史・注釈史を精査することによっ

て、前稿執筆のときには見えなかった事実が明らかになった。だが、「お（を）ごめく」が架空の古語であるという結論に変わりはない。というよりも、補訂すべくわたしの前に立ちあらわれた事実はどれも、前稿での結論を補訂、いや補強するための、じつに心強い味方であった。

四　用例の報告はどこから湧いて出たのか

わたしは、前稿が活字になってすぐ、残しておいた宿題にとりかかった。

蠢くという意味の「お（を）ごめく」が近世古学者の思い込みによる架空の古典語であるとするなら、当然、河内本帚木巻をふまえている徒然草第七三段の「はなのほとおこめきていふは」も「おごめきて」であるはずがない。なにしろ、「オゴメク」なる古典語の用例は、この二つしか報告されていないのだ。そのうちの実質的な用例である河内本帚木巻がじつは「オゴメク」ではなかったということになるなら、いつのころからからか「オゴメク」と認識されてきた徒然草の用例についても、嫌疑がかけられてしかるべきであろう。そもそもこの二例の報告は、どこから湧いて出たのだ。

わたしは前稿で、「オゴメク」という古語は、『湖月抄』が河内本の本文をつかって「こ」に濁点を付したことから生まれた、というふうにとれる書き方をした。ただ、論文を読んでいただければわかることだが、はっきりとは言わなかった。はっきり言わなかったのは、もうひとつの「オゴメク」の用例である徒然草について精査しないことには、それはミッシングリンクであろうと考えたからである。残しておいた宿題とは、そのことであった。

今年六月の九州大学国語国文学会で、「徒然草オゴメク考」と題して発表する機会をあたえられ、徒然草のテキスト史・注釈史を調査した結果をもとにして、半年前の宿題をはたした。のであるが、この時点で、前稿発表以後に得た源氏研究史に関する知見も、なにがしかあった。その「なにがしか」とは源氏注釈史上の必読文献とでもいうべきもの、裏をかえせば、なんのことはない、前稿はその必読文献を見落として、源氏物語語彙の考証をしていたのであった。源氏研究史への目配りが不十分であったといったのは、そういうことである。だがしかし、さきに言ったように、それらは前稿の結論を覆すどころか、「お（を）ごめく」が架空の古語であるというわたしの説を補強するものであったので、わたしは得意になってみずからの失態をその場で披露した。

会場で今西祐一郎氏から、源氏物語の版本に関する質問が

出されたが、そのときまでそこに目が向いていなかったわたしの答えは、要領をえないものであったかもしれない。しかし、質問に答えながら、徒然草版本のテキスト史・注釈史を辿ったのならば、源氏物語のそれもやらねばならない、いやそうするほうがわたしの説のためには有効であろう、という感触を得た。見落とした必読文献の件も、どこかで公表する機会をつくらなければならないことだし。ということで、学会発表「徒然草オゴメク考」の内容を活字化するその前に、源氏物語の注釈史・テキスト史を辿ってみることにした、それが本稿である。

前稿の結論がいまだ仮説であるのならば、目指すところはその仮説の実証である。

五　見落としていた必読文献

わたしが見落としていた必読文献とは、あろうことか、本居宣長の名著『源氏物語玉の小櫛』（寛政一一年〈一七九九〉刊）であった。

周知のように、というのもまことに烏滸がましいが、宣長は源氏物語を『湖月抄』で読んでいた。それは、全本文をもつ注釈つき版本ということでもっとも便利だからであって、

けっして『湖月抄』を善本と認めていたからではない。したがって、かれは『玉の小櫛』巻四において、古写本によるテキストクリティークをおこなっている。この本文批判は、凡例と読みあわせてみれば、「をこづく」のほうを善しとするごとくであるが、巻六の源氏本文の注釈では、河内本本文のほうを見出しにして、つぎのように言う。

はなのわたりをこめきて　俳優めきたる顔をして也、西宮記に、「右近衛内蔵の冨継長尾の末継、散楽を善くす、人合つて大いに咲ふ、嗚呼の者也」、注に「をかしきをこらへたるさま也」といへるは、ひがこと也、こもじを濁るもわろし、

西宮記の散楽演者の「嗚呼の者」から「俳優（道化役者）」→「嗚呼めく」に短絡させることの当否は別にして、宣長は、「こもじを濁るもわろし」と言って、河内本本文の「をこめきて」がオゴメクではなく、オコメクすなわち「嗚呼（烏滸）めく」であるとする。これは、わたしが前稿で論証した結論と一致する。宣長の注釈は、わたしが三〇枚の原稿を費やして考証した結論を、ひとことで片付けていたのである。宣長という先行研究を見落としたことの言い訳に聞こえるだろうが、宣長先生の言は、わたしの考証の正当性を支持するリトマス紙であった。

それともうひとつ、これもほぼ同じころに知ったのであるが、わたしにとって心強い味方が出現した。中世の源氏注釈の代表『花鳥余情』（一条兼良著）に、

はなのわたりをこめきて　をこめくはをこつくといふかことし

とあることであった（兼良自筆本、阪本龍門文庫覆製叢刊の影印による）。これこそ、河内本の「をこめく」は青表紙本の「おこつく」とほとんど意味がかわらないというわたしの見解を裏付けてくれる。

兼良の説はそのまま『岷江入楚』などにも踏襲されるのであるが、古学派が主流の近世から現代の源氏注釈では、ほとんど無視されているようであった。それどころか、宣長の斬新な指摘さえも、河内本の本文に言及したものであったためか、青表紙本をもって良質本文とする戦後の頭注形式の注釈書では、触れられる機会がなかった。そのため、古語辞典の類も、『玉の小櫛』のこの記述を無視しつづけてきた。

ただ、わたしには、宣長の一文に出会ったとき、ひそかにある予感があった。宣長の指摘が近代の源氏注釈でとりあげられることがあるとするなら、それは島津久基の『対訳源氏物語講話』であろう、と。島津の愛弟子である今井源衛先生が、この名著を称して、

「饒舌すぎて、脇道にそれるのが玉に瑕だ」

といいながら、そこがなんともいえない魅力なんだなアと言いたそうに、恩師を偲んでいたのを思い出す。演習の下調べも忘れて、源氏の脇道に誘いこまれて名調子の講義に読みふけった、あのころの研究室の書庫が懐かしい。

そういう予感があったから、じつは島津の著作の確認を躊躇していた。はたして今西氏から「あるよ」と言われて、観念して国会図書館に足をはこんだのである。『対訳源氏物語講話』の該当記事は、案の定、中世から近世にかけての源氏注釈史をもふまえた、すなわち『玉の小櫛』も『花鳥余情』も織り込んだ、博引旁証を絵にかいたような、七ページ以上の詳細な論文であった。

島津にしろ宣長にしろ、さらには兼良にしろ、源氏の専門家ならまず最初にあたってみる文献である。それに思い至らなかったのは、いくら門外漢とはいえ、粗忽の譏りはまぬがれまい。わたしにとって救いだったのは、三人とも「超」の字がつく格上の学者だったこと、島津の興味がわたしの結論の方向に行っていなかったことであった。宣長の一言は証明を欠いた定理のようなもので、たとえてみれば、わたしは、フェルマーの最終定理を、その定理の存在さえ知らずに証明した、などといったら顰蹙をかうだろうか。

いずれにしても、それらを知ったのが論文発表以後だったことは、わたしにとって幸運だったといえる。なぜなら、あらかじめ先行研究を知っていたら、源氏や国語学の論文を書くモチベーションなど、はなから持たなかったであろう。

六　中世前期の源氏学――注釈以前

まえおきが長くなった。では、以上のことをも盛り込んで、源氏物語帚木巻の問題箇所の注釈および本文について、ここでも時代をくだりながら辿ってみたい。時代をくだるのは、後世の源氏読解でもって刷込まれる予断を排除するためである。無論、後世の研究者であるわたし自身がそれを百パーセント実現できるとは思わない。だが、歴史の相対化に自覚的であろうと戒めていることを、ここで明言しておきたい。

周知のことだが、源氏物語の本文は、平安末・鎌倉初期の時点で、かなり混乱が進行していた。そこで藤原定家は家中の小女に手伝わせて、証本を作った。この定家の本文整定の事業をもって、源氏物語研究の劈頭と見なしたい。定家よりすこし遅れて、鎌倉幕府に仕えた源光行・親行父子も本文の校訂をおこなった。光行は定家より一歳の年少で、俊成の弟子である。親行は幼少のころから定家に学んだといわれる。この二本が以後の源氏本文の祖となる。前者の伝本を「青表紙本」、後者のそれを「河内本」と呼ぶ。

源氏伝本の詳細に筆を割くゆとりはないので、ここでは、ごく大雑把にいう。青表紙本は、校合作業の過程で生じた不審について、なるべく手を加えない、すなわち不審は不審のままにするという姿勢をとった。したがって、底本としてつかった本のおもかげを残しているといわれる。底本が何であったか、具体的には不明ながら、碩学定家のおめがねにかなった良質の本文であったにちがいない。こんにち、青表紙本が尊重されるゆえんである。

それに対して、河内本は積極的に不審を解消する方針をとった。底本および校合本の、短を捨て長を取ったのである。そのため、河内本本文は、こんにち、混成本文とみなされ、この「混成本文」という言い方には、望ましくないという意味あいが籠められる。こんにち、古典叢書類の底本に採用されることのないゆえんである。

しつこく傍点まで付して繰り返したのは、青表紙本・河内本にたいする右の評価が、まさに「こんにち」的文献学の思想の産物にほかならないからである。本文校訂の王道が、本文系統の純粋性を守ることなのか、それとも不審はのこさない合理的な本文を確定するものなのか。近代の文献学が前者

だからといって、中世の文献学もそうだったとはかぎらない。ましてや、そうであるべきだなどとは言えない。定家は本文の混乱ぶりについて「尋求所々、雖見合諸本、猶狼藉未散不審」（明月記）と嘆いたのだが、この嘆きを額面どおりに受け取るとするなら、不審に手をつけなかったのは、学問的慎重さというより、判断を留保しただけ、留保せざるをえなかっただけ、という見方もできるであろう。

中世の文献学の思想は、近代のそれとは違うだろう、そう考えるのが歴史を学んだものの理性である。近代になされる優劣の判断も、中世における優劣の規準と一致するとはかぎらない。たとえば定家の源氏学を相伝した三条西家の証本の一本（書陵部蔵本）がたしかに「おこつきて」でありながら、おなじ三条西家証本を称する別の本（日本大学蔵本）は「おこめきて」である。そして、「め」のかたわらに「つ本」とある注記が、「つ」を「め」に改訂したという意味であるならば、この改訂者の文献学は、青表紙本と河内本の本文の交流を考えない池田亀鑑式近代文献学では説明できない。それに不満を言い募るのは、本稿第二節にいったような、事実の歴史と学説の歴史を混同するという陥穽に嵌まり込んでいることにほかならない。

したがって、『湖月抄』は青表紙本系と河内本系どっちが優勢？、といった議論もそれほど有意義だとは思えない。『湖月抄』の本文がどちら系か見極められない、これまた混成本文だからといって、それが『湖月抄』の瑕になるものでもない。

わたしの議論にとって肝腎なのは、問題箇所に二通りの本文があったという事実なのである。そして、二つのオコはともに「烏滸（嗚呼）」であって、どちらの本文であってもかけ離れた解釈を誘引しない。ならば、中世の学者はこれを本文系統の相違と結びつけようとも意識しなかったであろう。おまけに、この二つの語は、中世初期においては現代語であった、というのが言い過ぎなら、かれらに古語というほどの古めかしさをまだ感じさせなかった。すなわち自明のことばであって、とりたてて語義注釈すべき対象ではなかった。

混乱の環境は、それを注釈しなければならなくなって作られる。

七　室町時代の注釈——オゴメクは実在したか

南朝の長慶天皇の著作『仙源抄』（弘和元年〈一三八一〉成立）は、最初の源氏物語語彙辞典であるが、その専順筆写本（新校群書類従所収）に、

をこめいたる　嗚呼也

という項目とその注記がある。源氏物語の語彙に限った場合のオコメクに関する記述のごく初期であろう。もっとも、この記述は具体的には初音巻にある「オコメク」について言ったものと考えられる。天皇の身近にあった帚木巻が「おこつきて」「をこめきて」のどっちだったかは、わからない。想像するしかないが、帚木巻の例がないということは、「おこつきて」であったのかもしれない。「をこめきて」のほうであったとするなら、天皇の著作には、最初の出現例である帚木巻の例が登録された可能性を捨てきれないからだ。そして、そのさい、帚木巻の「オコメク」だけを初音・常夏・総角などのオコメクと切り離すことはないであろうから、ならば、そのときの注記も、当然、「嗚呼也」となるはずである。

帚木巻の当該箇所が注釈史のうえに登場するのは、どうやら室町時代になってからのようである。正徹の『源氏一滴抄』（永享一二年〈一四四〇〉）は本文を抜き出しただけのものであるが、「おこつきて」の下に小書きで「嗚呼」と注記している。そして、源光行・親行父子の校訂本文「をこめきて」が注釈される初めは、さきにも言った『花鳥余情』（文明四年〈一四七二〉）であった。もういちど引用すれば、

はなのわたりをこめきて　をこめくはをこつくといふかことし

である。『花鳥余情』執筆にさいして著者兼良のかたわらにあった本文が「をこめきて」であったことを示す。兼良の念頭に異文の存在があったとしたら、これはさしたる意味のちがいはないという注釈である。もし異文の存在を知らなかったのなら、同義のことばに置き換えたにすぎない。いずれにしても、この「をこめく」はオコメクすなわち「嗚滸めく」であるということの証言にほかならない。

そして、『花鳥余情』のこの記事は、本稿にとっては、源氏注釈史においての意味よりも、国語史上の意味が重要となってくる。すなわち兼良とその同時代人はこれをオコメクと発音していたはずで、ということは、「オゴメク」などということばは、室町時代語にもなかった、中古・中世にそのような語は実在しなかったという、わたしの説を裏付けるなにものでもない。一五世紀後半でもまだ、「オゴメク」（蠢く）ということばは、文献上にあらわれていない。

それから約二〇年後の『一葉抄』（藤原正存著、明応四年〈一四九五〉）には、

はなのわたりをこつきて　おかしきをねんしたるさま也
一本をこめきてとあり

（源氏物語古注集成九、底本狩谷図書館蔵写本）

とある。この注釈書の底本本文はオコヅク。異文の存在にも触れているが、これもオコメクという認識だったと考えるほうが自然である。そして、この注釈文の「ねんしたる」は「念じたる」、おかしいのを我慢している様子だという解釈であるが、これはオコヅクの語義を言っているわけではないということに、ぜひ注意しておきたい。この注釈文には、さらにもうひとつ、注目し記憶しておくべき点がある。次稿であらためて再説するつもりだが、それは、この一文が、江戸時代においては源氏物語よりもむしろ、徒然草の「鼻のほどおごめきて」の注釈として機能している、ということである。

オコヅクの語義を言っているわけではないのは、一六世紀中葉成立の『万水一露』（永閑著）のつぎの記述も同様であろう。

はなのあたりをこつきてかたりなす　鼻のうこく心也
（寛文三年刊版本による）

オコヅク行為が「鼻のうこく」動作になるという解読である。

そして、中世も最後にさしかかった文禄三年（一五九四）、それを締め括るかのように、『花屋抄』（花屋玉栄著）につぎのようにある。

こゝろはえなからはなのあたりおこめきて　心はえなからとは心に申へきやうはうかめなからしよていをしてはなをおこ〳〵としてかたる也　うそかましきかほつきの事也　おこつきてと有本もあり　何も同し事也

未刊国文古註釈大系所収の活字本はすこしく頼りないので、引用には身近な写本の内閣文庫本をつかった。これに漢字をあてて校訂すれば、「心は得ながらとは、心に申すべき様は浮かめながら所体をして、鼻をオコオコとして語る也。嘘がましき顔付きの事也」となる。「オコオコとして」は「烏滸烏滸として」であって、「おこつきてと有本もあり　何も同し事也」は、『花鳥余情』の説明をかなりわかりやすくし、この注釈者のつかった源氏底本も「オコメク」であったことを証明する。

八　江戸初期のテキストと注釈
――帚木巻「オゴメク」の出現

王朝文学作品のテキストは、中世期に書写されたものに濁点は付されていないのが一般である。江戸期になって書写されたり梓に上せられたりしたものも、しばらくそれを継承するが、やがて、いわゆる読み癖を意識したものが現れはじめ、濁点を使用したテキストが作られるようになる。源氏物語版本についていうなら、古活字版の時代は、写本時代にならっ

て濁点をつかわないので、問題箇所が青表紙本系であっても河内本系であっても、版面からの清濁の判断はできない。また、写本のばあい、濁点が付されてあっても、その付された年代がはっきりしない場合が大半である。本文は古くても、音読用に付される濁点は新しいということも予想され、その見極めは慎重を要する。というよりも、へたに見極めようとするのは、危険である。

ここに、さきの『花屋抄』から関ヶ原をへだてて四五年後の寛永一六年（一六三九）、源氏物語語彙辞典のひとつ、『続源語類字抄』（猪苗代兼也著）がある。これに、帚木巻の「鼻のあたりをこつきて」を説明して、

おかしき時は鼻をこめく事也

（源氏物語古注集成二一、底本内閣文庫本）

とある。一見すると『花鳥余情』と変わらないようだが、わたしにはいささかの違和感がある。これを『花鳥余情』や『花屋抄』と同質の注解と見られないそのわけは、『花鳥余情』『花屋抄』がオコメク（烏滸めく）を説明するのにオコヅク（烏滸づく）をもってしていたのにたいして、近世初頭の連歌師は「をこつく」を「をこめく」で説明したこと、である。注釈される語と注釈用の語とが入れ替わっている。

『続源語類字抄』の「をこめく」はすでに、オコメク（烏滸めく）ではないのではないか。もっとも、この注釈文は、おなじ連歌の家の古典学者の手になる『紹巴抄』（永禄六年〈一五六三〉ごろ）の「をこつきて　をこめく事なり」を踏襲しているとも考えられるから、わたしの違和感は、あるいは勇み足であるかもしれない。だが、後続の版本テキスト類から推し測ってみると、まんざら当たっていなくもないように思われる。

慶安三年（一六五〇）刊行の『絵入源氏物語』（山本春正編）は、おそらく最初の濁点付き源氏テキストと思われるが、問題箇所の本文は、

はなのわたりおこめきてかたりなす

と河内本系のそれである。この部分、濁点はみられない。この版本の濁点は厳密とはいえず、したがって、濁点の有無でもって、清濁の判定はできない。だが、「め」の仮名の右側に「つイ」と異文の校異を記す。

そして、寛文三年（一六六三）、前掲の注釈書『万水一露』が刊行された（濁点表記なし）。もういちど引用すると、

はなのあたりをこつきてかたりなす　鼻のうこく心也

それから一〇年後の寛文一三年、『首書源氏物語』（一竿斎著）が出版された。首書（頭注）に『万水一露』を引くことのおおい注釈書である。それには、

はなのわたりおごづきてかたりなす

とある。そして、頭注して、

或抄　我もおかしくて鼻おこめく也

とする。この版本の濁点も、お世辞にも厳密とはいえない。本文の「おごづきて」も、これでは意味をなさない。頭注の「鼻おこめく也」は、そこに『万水一露』の影響を考えるなら、「うごく」の意味だととれるし、そのほうが注の文章としても自然である。とすると、頭注の「おこめく」は、語感からいってもオゴメクに結び付きやすい。いや、帚木巻の「をこめく」を当時たしかにオゴメクと発音していた事実をしめす資料が、すでに存在する。

それは、『源氏清濁』という読み癖資料（京都大学国語国文学資料叢書所収）で、後水尾院サロンの中心人物であった中院通村の手になる。書名からもわかるように、源氏物語の語彙の清濁を記したもので、後水尾院周辺の源氏講釈の実態がしられる恰好の資料である。それによれば、帚木巻のこの語の見出しは、

おこめきて

である。そして、これには二種類の声点が左右にあるのだが、二つとも「こ」に濁音符が付されている。これは、「をこめくはをこつくといふかことし」と言った一条兼良説を否定するものである。通村の没年は承応二年（一六五三）であり、『源氏清濁』も当然それ以前であるのだから、『首書源氏物語』の頭注「鼻おこめく」が「鼻おごめく」である環境は、じゅうぶん整っている。「鼻おごめく」であるなら、首書（頭注）は河内本本文の語義を言ったことになる。また、さきの『紹巴抄』にやはり声点の付された江戸初期写本が伝存しているが（稲賀敬二蔵）、それにも「こ」に濁音符がつく（翻刻平安文学資料稿による）。

『源氏清濁』でもうひとつ注目すべきことに、総角巻のところに「おこめき」も掲出されているのだが、こちらの見出しの「こ」には清音符が添えられている。これが何を意味するのかといえば、中世期には初音・常夏・総角などのオコメク（前稿参照）とおなじ語と考えられていたであろう帚木巻のオコメクが、近世初期にはそれらから引き離されて、異なる語「お（を）ごめく」と認識されるに至ったということである。それは、帚木巻のみこれをオゴメクと発音したからであった。

かくしてここに、「お（を）ごめく」というあたらしい語形ができ、それに「蠢く」という語義が当てはめられたのであった。

『湖月抄』の成立とされる延宝元年は、すなわち『首書源

氏物語』刊行の寛文一三年である。『湖月抄』に『首書源氏物語』の影響があるのは、すでによく知られていることだし、『首書源氏物語』が『万水一露』のこれまた影響下にあるのは、頭注にしばしば引用していることで明白である。『湖月抄』では、問題箇所の本文は、

はなのわたりおごめきてかたりなす

である。この「おごめく」が近世初期にあらわれた、新しい古典語であることは、贅言を要すまい。以後、「お（を）ごめく」は、源氏注釈の世界では、河内本本文に言及したときのみ「蠢く」という自明の語義をもってひきあいに出される。宣長の否定説は一部の古学者（石川雅望・橘守部）に支持されたが、近代になって前掲島津以外に顧みられたことはないといっていい。古語辞典の世界では、仮名遣に問題をのこしながらも（『疑問仮名遣』参照）、図版に見るように、お隣さん同士に引き裂かれたまま登録されて、現在に至っているのである。

新潮国語辞典第二版

いる。愚かなさまである。「―びたるものなりけり〔流布本十訓〕」

おこめ・く【(御)痴めく】をこ―（動）（文ヵ四）愚かなように見える。ふざけた様子をする。「―い給へる大臣〔源・常夏〕」

おごめ・く【蠢く・(蠢)動く】（動）（文ヵ四）ぴくぴくと動く。わずかに動く。うごめく。「鼻のわたり―きて〔源・帚木〕〔一本〕」

おこも【(御)薦】（薦をかぶるので）乞食（コジキ）をいう幼児語・女性語。「―さん」

なる。「皇訓」㉞【(盛んになるかな)】

おご・る【(蹈)たかぶる論天安点りたる声らざらむ霧】③気

九　次稿予告――ミッシングリンクを求めて

かつてオコメクと読まれていた源氏帚木巻の「をこめく」が、江戸時代になっていつのころからか、それまで古典語彙になかった語形オゴメクと認識されていた（『源氏清濁』など）。それらしい語義も付与されて、宣長が指摘するまで、いやその後も、源氏学者のあいだで定着していた。オゴメクと発音したから蠢くと解釈したのか、蠢くという意味が先に立ったからオゴメクと読んだのか。これは、だが、源氏物語を眺めていただけでは埒があかない。

前稿「オコヅク考、オゴメク考」のとりあえず訂正すべきところは、オゴメクが『湖月抄』によって生まれたのだろうという推定である。以上に見てきたように、『湖月抄』以前に種が蒔かれていたことは明らかになった。だが、どういう蒔かれ方をしたのか。もうひとつの用例、徒然草の「オゴメク」の森に入って行かないことには、失われた輪（ミッシングリンク）は見つからない。

そして、結論のひとつを先に言ってしまうが、「オゴメク」

が近世初頭のあたらしい古語であったのとおなじように、『湖月抄』のその傍注、

おかしきを念したるさま也

も、中世の源氏注釈書『一葉抄』の説を引き継いだというよりも、そのころ常套句化していた徒然草注釈の一文であったことも明らかになるであろう。

そう、宿題の解答はまだ終わっていないのだ。

注　青表紙本「おこ（烏滸）」、河内本「をこ（烏滸）」はいずれも定家仮名遣によるものである。なのになぜ表記が相違するのかといえば、前稿でもふれたが、「オコ（烏滸）」は、「お」「を」両方に登録されているからである（行阿『仮名文字遣』）。あるいは、アクセント変化のゆえとも考えられる。

[付記]　本稿は口頭発表のさいの今西祐一郎氏の質問に触発されて草したものである。発表後も今西氏から有益な教示を得たことを記して、感謝の意にかえたい。

（しらいし　よしお・文部科学省主任教科書調査官）